混雑効果としての秩序維持コスト

—実体験した事例を中心に—

ケオラ　スックニラン

海外派遣に出発する前、ヨーロッパの比較的小さい国出身で、有名私立大学の副学長と会食をする機会があった。その席で伺った話で、最近まで理解できなかった興味深い話がある。それは先生が度々行く海外出張から日本に戻る時、飛行機や空港などでみる、または聞く「英語」での禁止ごとの多さやその内容が耳障りで不愉快だ、という話である。主に東南アジアに出かけ、治安の良い日本に戻ってくると安心する筆者には、素直に私もそう思うと同意はできない話であった。飛行機での通関に関する警告の表現は、東南アジアの方が強いし、外国人が現地人と異なる扱いを受けるのも大差がないと思っていたからだ。しかしスウェーデンでの研究生活が一年過ぎた最近になって、その真意が理解でき始めたと感じる。これに気づくきっかけは、北欧に乗り入れる飛行機や空港での簡素な入国・通関手続きに慣れてしまい、成田空港での係官の真剣な案内や大きな英語での禁止メッセージに違和感を覚え始めたことである。とはいえ日本の事情や現行のルールでは仕方がないとも考える。成田空港を利用する乗客の多さに加え、日本では入国手続きが日本人と外国人でそもそも大きく違う。混ぜると効率が低くなる、あるいは大きな混乱が生じる可能性は否定できない。また災害が起きる際の日本人の規則正しい行動からもわかるように、日本には世界にないまたは浸透していない常識、規範が多く、それを「主に」知らないまたは慣れていない外国人に伝える必要があるのは理解できる。今回の現地情勢報告は、様々な学問で盛んに研究されている「ティッピング・ポイント（Tipping Point）」[1]と空間経済学での「混雑効果」の概念を用い、最低限の規則で秩序が保たれている北欧の状況やそれが可能な理由を考察してみたい。

まず、私の仮説はこうである。ある社会が一定水準の秩序を維持しているとしよう。たとえば町の清潔さ、犯罪の少なさの水準などである。この水準の秩序を維持するには一定数以上の社会の構成員が、ルールに従う必要があるとする。つまり、ルールを守らない人の数が一定水準以下でなければならない。何らかの理由でこの水準より一人でも多くの人がルール違反をすると秩序が崩壊、あるいはより低い水準に均衡する。具体的には、町が汚くなる、または治安が恒常的に悪い状態などである。当然のことながら、より多くの人が集まると違反をする人の確立が大きくなるし、従来想定されていない違反が生まれる可能性も出てくる。そのため、構成員の数が増えれば増えるほど、同じ秩序をたもつにもより多くのルールが必要になる。ルールの制定・浸透・適用には、コストがかかるため、一種の混雑効果と捉える。

以下日本と対比しながら派遣先のスウェーデンを中心とする北欧での実体験から、この仮説をサポートするいくつかの根拠の提示を試みたい。北欧での生活ではルールがあいまいな状況に直面する。ここで、ルールがあいまいとはルールがない場合とルールはあるが、適用があいまいな場合と定義する。これまでの体験に基づく事例を、順を追って紹介したい。まず、ひとつ目は、空港での極めて簡素な手続きである。入国するにはパスポートと査証しか必要ないため、着陸前の入国カードや関税申告書の配布は一切ない。入国手続きの際にEU市民とそれ以外専用のレーンが存在する。が、筆者がEU市民のレーンに間違って進んでも、拒絶されることは一度もなかった。たまたまそのときだけの可能性はあるが、少なくとも成田空港のように、担当者が行列の最後尾で、時には厳しい口調で誘導する光景は目撃したことがない。成田では再入国ですと告げてもパスポートを取り上げられ確認されることはなんどもあった。また成田空港と違い、手荷物用ベルトコンベアに立つ位置が、特に制限されない。申告する荷物がある出口はチャイムを鳴らして、職員を呼び出す。これは今でも通るたびに思わず笑ってしまう。推測の域を出ないが、恐らく実質的な持ち込み制限は事前に犬などで検知できる麻薬類に簡略化されているのだろう。冗談口調ではあるが、動植物検査が厳しくない理由として、域外のウィルスや菌は北欧の寒さで死滅するからというスウェーデン人もいる。同様なことを成田で実施すると大きな混乱が生じる可能性は高い。現行の制度では、入国の際に必要な手続きは、日本人と外国人では大きな違いが存在する。指紋採取、写真撮影、入国目的の確認などの有無である。日本に不法入国しようとする外国人の数が多いのも事実である。同じ列に並べば、数

が多いため、本来簡素な手続きで入国させた日本人や特別在留外国人が、効率的に処理できない可能性は高い。大人数が狭いスペースで滞留すれば、大きな混乱になろう。

次に、北欧は環境先進国だと思う人は多いと思う。実際私もそう思っていた。しかし、たとえばスウェーデンでは、ゴミの分別もやる必要があるのかはっきりしていない。最初の半年間住んでいた比較的大きな集合住宅では資源ゴミなどいくつか分けて入れる箱があるが、大家が雇った清掃員が毎日仕分けしているため、分別の義務の有無、またはそれが誰にあるのかも不明である。カウンターパートや近隣住人に質問しても、明瞭で一致した回答が得られたためしはない。もっと驚いたのは転居先のもっと小さなアパートの大家の説明である。家の前にある中型ゴミ箱に入るものは、何でも入れてよく、それ以外は収集センターに持って行ってという極めてシンプルなルールである。厳しくかつ細かい分別ルールでよく知られる日本、または欧州の大国のドイツなどと対比して考える場合、シンプルなルールで大きな問題が生じていない理由は、面積当たりのゴミの量の少なさとしか思い当たらない。

公園も日本ではルールが多い場所のひとつである。サッカー禁止、野球禁止、火気厳禁などさまざまなルールがある。時にはどうみても特定な行為に不満を持つ近隣住人が設置しただけのようなルールを示す看板もみかける。もちろん公園の大きさや、密集した住宅地での立地などを考えると、禁止する必要があることは、理解できなくもない。しかし派遣先のルンド市の市立公園では自転車と車の進入禁止以外の禁止ごとが見当たらない。もちろん看板を探す努力は何度かした。集まる人たちのやっていることをみる限り、火を使った調理も含めて公園でしてみたいことはたいていできる。動物―住み着いているカモ、アヒル、白鳥―などに餌をやるのも自由である。子どもの同級生の親に誘われ、これが許されると知って以来、時間をみつけては娘と動物たちに餌をやりに公園に行っている。しかし、動物が大量発生する様子は伺えない。また来園者が自由に様々な活動をしているので、大きな混乱が起きているようにはみえない。公園に来る、または来られる人の数に比べ、公園の面積が大きいことしか、筆者に考えつく理由はないのである。

日本でやれば秩序が維持できなくなるだろうと思える行動は、派遣先での体験を考えれば、いくらでも出てきそうである。例えば他にも、乗客がバス停や電車のフォームで並ばないのは当たり前であるし、前に並ぶ人が延々と売り場とレジを行き来しながら店員と相談する場面にも遭遇したことがある。一方通行が多い市の中心部では逆走する車を目撃することも何度かある。タバコの吸殻をポイ捨てすることや路上に唾を吐く人が多いのも、最初は戸惑いを感じた。乗客が荷物やベビーカーなどで椅子を必要以上に、座席を使っていることもよくある。これらのことをたとえば混雑する日本の駅、バス停、車内などで行えば、たちまち秩序が崩壊するだろうことは想像に難くない。もっと切実な事例もある。たとえば、自分や派遣先の同僚の研究員も経験しているが、予約している医師や看護士との面会が、彼らの休暇または「風邪を引いた」との理由でキャンセルされることである。私の場合は通常の定期健康診断であったからまだしも、手術を受ける予定の同僚は本当に気の毒だった。もちろん一カ月遅れの手術で同僚は今元気に職場復帰している。私はいくらなんでもこれは大きなルール違反だと思った。仮にこのようなルール違反が日本で許されると予約システム、延いては医療制度そのものが崩壊する可能性を秘める。

日本が実現している集積秩序と経済発展の水準は、奇跡に近いと私は考える。少なくとも一億人以上の人口規模と高い密集した状況で、これを実現しているのは、日本だけである。日本人が多くのルールを受けいれたことが、秩序ある集積とそれによる集積効果を可能にし、そして、それが不利な条件尽くめのこの国を世界の経済大国に発展させたのだと考える。日本を発展モデルにしようとする新興国は少ない。これは、大勢な人が集まっても秩序が保たれるルールを受け入れる覚悟、または資質があるかどうかが、決定的に重要であろうと個人的な意見を述べ、結びとしたい。

《注》

(1)ティッピング・ポイントとは、簡単にいえば、小さな変化が、大きな均衡状態の変化をもたらすティッピング・ポイントの一例である。詳しい定義（http://www.santafe.edu/research/working-papers/abstract/aecbfc-4c6f63132ad19706066c864f27/）を参照されたい。

KEOLA Souknilanh／アジア経済研究所　在スウェーデン・ルンド海外研究員